読書

〈増補新版〉時代の証言者　伊藤千代子

藤田廣登　著

新発見の資料や新証言を総結集

こころざしつつたふれし少女よ　新しき光の中におきておもはむ

高き世をただめざす少女等ここに見れば　伊藤千代子がことぞかなしき

本書の冒頭に引かれている土屋文明「某日某学園にて」と題する短歌6首の中のものである。

学習の友社・1600円

ふじた・ひろと　34年生まれ。労働者教育協会理事。『ガイドブック・小林多喜二の東京』（共著）ほか

1935年、雑誌『アララギ』に発表、のち第4歌集『六月風』に収められた。伊藤千代子は土屋文明の諏訪高女時代の教え子で、千代子の聡明さに将来を期待し、妻テル子ともども、心を傾けて導いたのであった。

千代子はのちに東京女子大に進み、科学的社会主義を自らのものにすると同時に、学内に強力な「社研」を組織すると共に、全国的な「女子学連」づくりにも力を注いだ。千代子は、小林多喜二の小説でも知られる「三・一五事件」で逮捕された。特高警察の拷問と、夫の転向という二重苦の中で、党員としての誇りと原則を堅持し、昂然とたたかった。29年8月に拘禁精神病を発症し、松沢病院に入院、9月24日に急性肺炎で、わずか24歳で命を終えた。

本書には伊藤千代子の不屈の生涯とその真実の人間像を描く上で、いささかの空白も作るまいとする著者の気迫がある。

伊藤千代子についての先行諸研究を受けつぎその正誤も正しつつ、本書では、この10年来の著者による新発見の資料や同時代者のあらたな証言の発掘などが総結集され、伊藤千代子研究の高い到達点が築かれている。著者渾身の労作である。多くの人々、とりわけ次代を負う若い人たちに読んでいただきたい。

本書の中で、東京女子大の安井てつの「学長文書」の発見を語る第6章は力があった。「三・一五事件」で、検挙、連行される教え子の学生に、安井てつ学長が、留置場の夜寒を案じて、一人ひとりの背中に真綿を背負わせて送り出したという一節は、まぶたを熱くする。

土屋文明と安井てつの二人の真の教育者の姿も本書で光る。

評者　碓田のぼる　歌人